

著者 會員 工学博士 池田 篤三 郎*

拙著に對する北澤氏の御副談に御答へ致します。

1. 散氣盤は本文記載の通り在來の矩形のものをそのまま各法に用ひたので回転式兩者の比較には支障がないと思ひます。勿論流線形にすれば幾分抵抗も少くなりますが自動回転式の如く回転數の少い場合には大した相違はありません。翼の形狀も本文記載の通りで理論から云へば翼に當る氣泡と水の混合上昇流の有する勢力が翼を離るゝ時完全に翼の運動の勢力に代る様にすれば良いのであつて、このため著者は翼の形と、翼と散氣盤の相對位置を色々変へて實驗し形と位置を定めました。回転力は使用空氣の圧量に依つて変化しますから一概に申されません。
2. 氣密保持の事も本文記載の通りであります。自動回転式は機械回転式より回転が滑かであるから氣密性を保ち易い様であります。
3. 修繕の困難も亦本文記載の通りですが自動回転式は動力傳導裝置取外しの要がない故機械式より幾分楽であります。

尙實驗に對し種々御註文がございましたが今後何處かで御説の様な方法で實驗せられ一日も速かに發表あるを期待致します。其他色々の御意見は有難く拜聴し今後の参考に資し度いと思つてゐます。

中 條 都 一 郎**

1 緒 言

私は池田氏が名古屋に於て試みられたる可動式の散氣裝置が實施に當り、如何なる計畫設計を以て設備さるゝかは詳細に知る由もないが、池田氏の説明に依り思考するに或は細長い從來のエアブロー式に採用されつゝあるが如き水路に、一定の距離を以て多數設備さるゝものではないかと想像さるゝのである。果して然りとすれば、此の方法は左程新機軸を出したる曝氣方法なりとは言ひ難い様に考へられる。又唱へらるゝ程の曝氣成績（經費と淨化度とより見て）を得るものとも信ぜられないのである。實驗室に於ける實驗は實驗室に於ける理論であつて、大規模の實施に於ては又自ら異つた種々の問題を提供する事とならう。

如上の觀點から烏滸がましくも大先輩たる池田氏の説に對して異見のある所を述べて見たいと思ふ。斯う云ふ議論は御互に研究の上刺戟ともなり、或は長短相補ひて斯界に幾分でも参考に資せらるゝものと信ずるからであつて、どうか筆者の意のある所を誤解なき様御願ひして置く次第である。

2. 促進汚泥法に於ける曝氣様式の分類に就て

池田氏の説明に依れば、促進汚泥法に於ける曝氣様式は次の如く分類されてゐる。

* 名古屋市水道局長

** 京都市下水課長